

「対話的問題提起学習」における 参加者のやりとりの実相 —非母語話者の問題提起場面に注目して—

半原 芳子

1. 研究背景

近年、日本に定住する外国籍住民の増加に伴い、日本語母語話者住民（以下、母語話者）と非母語話者住民（以下、非母語話者）が共生する地域のあり方に関する提案が各研究領域でなされるようになった。日本語教育においても、母語話者と非母語話者が共に集う地域の日本語教室を両者の共生に向けた相互学習の場として変革させるため、様々な提案や試みがなされている。本研究では、母語話者と非母語話者が地域住民として対等な共生を今、ここで実現する学習法として近年注目されている「対話的問題提起学習」（岡崎・西川 1993）の実践に着目する。

2. 対話的問題提起学習とは

対話的問題提起学習とは、識字教育者であるフレイレ(1970)によって提案された問題提起型学習(problem-posing education)を、アメリカの移民を対象にした第二言語としての英語教育に取り入れ、その方法論を確立したワラシュタイン(Wallerstein 1983)に起源をもつ学習法である。ワラシュタイン(1983)では、移民が、自身が抱えている生活上の問題を、教師と対話を通じて解決を図りながら、その過程を通じて、第二言語である英語を副次的に学んでいくことが目指される。岡崎らの提起する「対話的問題提起学習」では、対話の場に参加する者として、教師、非母語話者に加え、母語話者が想定される。そこでは、非母語話者と母語話者の両者がともに暮らすなかで生じる生活上の問題をきっかけに、双方が自己の枠組みを省察しながら、対話を通じて新たな枠組みを協働で創り出し、解決を図ることが目指される。対話的問題提起学習に基づいた実践は、野元(2000)¹、お茶の水女子大学大学院日本語教育コース(2000,2001,2002,2003,2004,2005,2006)などがある。しかし、実践の報告はなされているものの、

それらを実証的に研究したものは少なく(Ohri2005, 金・野々口 2005)、対話的問題提起学習を、母語話者と非母語話者の共生を実現するための方法としてより精緻にしていくためには、実践上の困難点や課題を明らかにし、実践に還流させていく必要がある。

3. 研究方法

3.1 研究目的

対話的問題提起学習における母語話者と非母語話者のやり取りを検証し、実践上の困難点を明らかにすることを目的とする。本研究では、活動中、非母語話者が自身の生活上の問題を提起したにもかかわらず、その問題が母語話者によって取り上げられなかった場面を抽出し、そのやりとりの内容上の特徴を探る。

3.2 対象フィールドとデータ

対象フィールドは都内某大学周辺地域住民を対象に行なわれた対話的問題提起学習である。期間は2005年7月24日から8月1日まで(28日を除く)の8日間で、毎日2時間半ほど、同大学の教室を使用して行なわれた。当該クラスは、多言語多文化共生社会を担う日本語教員の養成を目的とした教壇実習用のクラスで、実習生9名(母語話者5名、非母語話者4名)がクラスの運営を行なった。参加者は大学近辺に住む、母語話者6名、非母語話者9名である。データは活動中の両者の話し合い場面を録音し文字化したものである。本研究では、非母語話者が日本で生活している上で抱えている問題を具体的に提起した場面のなかから、提起された相手の母語話者がそれを問題として取り上げず、次の話題に移っていったと解釈される場面を分析の対象とした。

4. 結果

分析の結果、母語話者の対応のし方により、次

のような4つのパターンが浮かび上がった。

- ① 問題が提起者の思い込みで、実在しないものとして扱われる
- ② 問題が一般的なものとして扱われる
- ③ 問題が偶然的なものとして扱われる
- ④ 問題が冗談、かつ他人事のように扱われる

以下、パターン別に会話例を示す。会話例のJは母語話者、Fは非母語話者である。

会話例①「問題が提起者の思い込みで、実在しないものとして扱われる」

01F5: 「外人」と聞いたらこの世界の人じゃなくて、他の世界の人という意味もあるんですね

<中略>

31J6: 日本人はそんなにあの一偏見を持って内と外を区別してるっていうわけではないので(略)なかなかおらないじゃないかなと思いますよ

<中略>

36F5: でもですね、普通のときいつも外国人とって、なんか怒ったとき外人とっていったらその意味全然違うと思います

<中略>

38J6: 実際には辞書なんかでも書いてある通り、本当の意味ではあなたの方が感じるというような悪い意味で日本人は全然使っていないということです

<6日目>

これは、6日目「外国人の集住地域」というテーマで活動が行なわれたときのものである。ここでは、トルコ出身のF5が、日本語の『外人』と『外国人』の意味の違いについて問題を提示している。それは二つの言葉はそれぞれ意味が異なり、『外国人』は他の国の人という意味であるが、『外人』はこの世界の人ではなく他の世界の人という意味がある、だから自分は日本人から『外人』と言われると非常に嫌な思いをする、というものである。その問題提起に対してJ6は、「でも日本人はそんなにあの一偏見をもってうちと外を区別してるわけではないので」と二つの言葉の意味に違いはなく同じであることを述べる。それに対し、F5は、普段は『外国

人』と言っている日本人の友人が怒ったときは自分に向かって『外人』と言う、という自身の実体験をもとに二つの言葉の意味は違うと反論する。しかし、J6は、辞書の表記を例に出し、二つの言葉の意味は同じであることを再度述べ、問題を、提起者であるF5の思い込みとして扱い、以降二人の意見は交わることのないままこのやりとりは終了する。

会話例②「問題が一般的なものとして扱われる」

03F1: あの、ほとんど日本人ですけども、なかなかあの一その一「おはようございます」や「こんにちは」で終わってしまうことが多いですね

<中略>

16J9: でもね、誰だって無関心、無関心じゃない

17F1: うーん

18J9: あの一・・・別に一つて思う、別に一つていう感じあるでしょう？

19F1: うーん

<7日目>

これは7日目「未来への道」というテーマで活動が行なわれたときのものである。ここでは、中国出身のF1が、アパートの住民に会っても「おはようございます」や「こんにちは」という挨拶だけで終わってしまうことが多く、それ以上の話へと発展させるにはどうすればよいか分からないという問題を提示している。その問題提起に対してJ9は、「でもね、誰だって無関心、無関心じゃない」と、誰もが他人に対して関心を持たず、そうした近所づきあいの希薄さは、外国人対日本人の間だから起きているのではなく、一般的なものであるということを述べる。F1は納得しない様子であるが、結局具体的な解決策は探られることのないまま、この問題に関するやりとりはその後話題が別のものに移ることで終了する。

会話例③「問題が偶然的なものとして扱われる」

07F7: 言葉を使いたい、でもあっち側はやっぱ
り考えが違う、分からないから言ってほ
しくないって
08J3: 変な風に考える
09F7: そう
10J8: それはたまたまその人達の心が貧しいだ
けよ
<中略>
14J8: そうじゃない人もいるから、たまたま自
分は今隣りにそういう人がいるんだから
って過ごしていかなければそんな人、ね
<5 日目>

これは 5 日目「定住外国人問題と教育」という
テーマで活動が行なわれたときのものである。ここ
では、ブラジル出身の F7 が、日本の小学校に通っ
ていたとき、日本人の同級生から母語であるポルト
ガル語を話されると自分達は分からないから使わな
いで欲しいと言われた、という問題を提示している。
それに対する J8 の対応であるが、「それはたまたま
その人達の心が貧しいだけよ」と、そこで起きた出
来事の原因を、その場にいた日本人生徒の気質に帰
す発言をする。そして「そうじゃない人もいるから、
たまたま自分は今隣りにそういう人がいるんだから
って過ごしていかなければそんな人、ね」と、F7
の経験が偶然であることを繰り返し、今後母語の使
用を認めない人がいても気にせず過ごしていかな
ければならないと助言をしている。この問題に関す
るやりとりはこのあと話題が別のものに移ることで終
了する。

会話例④ 「問題が冗談かつ、他人事のように扱わ
れる」

01F4: 日本の人たちって言うのは相手と接する
最初にまず防御っていうんですか
<中略>
06J#: 本音を言わないという感じですか
07F4: そう、向こうは
08J3: 挨拶だけとか
09F4: そうそうそうそう、ふーんてなかでー
10J3: 逃げちゃう。あははは
<中略>

27F4: だから頭にきます{一同爆笑}

28J3: 私たちはだめですね。もう日本人じゃな
いかも

29J4: うーん（**） じゃなーい

30J3: 誰でも、うーん、誰でも大丈夫

31F4: でもね、私日本にきて、あの一、一番び
っくりしたのは何かっていうと・・・

<中略：九州の人に親切にしてもらった話>

87F4: その思った、っていうと九州、その本土
と違って、九州というのはすごくあった
かみ・・・

<中略>

126J4: 東京では

127F4: 東京というのは

128J3: 難しい{笑い}

<7 日目>

これは 7 日目の「未来への道」というテーマで
活動が行なわれたときのものである。ここでは中国
出身の F4、そして東京出身ではない J3 と J4 が会
話に参加している。まず、F4 が、日本人は初対面
場面において防御的でなかなか心を開いてくれない
という問題を提起する。その「防御的な日本人」が、
F4 と J3 と J4 との間で共同で作り上げられたあと、
その日本人を、J3 は他人事のように笑っている。
後半 F4 は、「でもね、私日本にきて、あの一、一
番びっくりしたのは何かっていうと・・・」と、九州
を訪れたときのことを話し始め、九州は本土とちが
ってあったかみがあるという話をはじめる。そして
F4 のその九州についての話がひと段落したところ
で、東京では初対面の人に対して温かく接すること
が難しいということが、東京出身ではない参加者全
員の合意として確認され、再び笑いが起こったあと
で、この話題についてのやりとりは終了する。

5. 考察

今回、対話的問題提起学習の一方の当事者であ
る母語話者の対応に焦点をあて、非母語話者から具
体的な問題が提起されたにも関わらず、対話が成立
しなかったやりとりの特徴を探った。その結果、問
題を提起された母語話者の 4 つの特徴的な対応パ
ターンが観察されたわけであるが、これは「対話的問
題的学習」自体が内包する難しさを端的に表した結
果であると言えよう。岡崎(2006)は、対話的問題提

起学習の難しさとして、この学習法が、人々が教育の場として慣れ親しんだ知識伝達型の「銀行型教育」ではなく「解放のための教育学」に依拠していること、また、母語話者が非母語話者に日本語・日本文化を教える場ではなく、母語話者と非母語話者が対等に参加する場であることを挙げている。対話的問題提起学習の文脈において母語話者は、自分が「教え」相手が「教えられる」という安全の図式が壊されるとともに、自身が学ぶ立場に立つ。そして非母語話者の問題提起場面においては、自分の属す日本社会が内包する問題が否応なしに突きつけられることになる。非母語話者が日本で生活する上で感じる問題は、共生社会の実現に向けて、受け入れ側である母語話者が積極的に捉え、考えていかなければならない重要な課題である。しかし、それを解決するためには、母語話者は、非母語話者が提起した問題を問題としてきちんと取り上げ、そして自身をその問題を作り出している社会の一構成員という立場に位置づけ、普段の自分の行ないを省察することが求められる。そしてそれは時として、問題を提起した目の前の非母語話者に対し、その問題を起こしている側として対峙するという、大変厳しい立場を迫るものでもある。今回観察された4つのパターンは、そうした母語話者の立場の厳しさを物語るものであるといえよう。

今後は、母語話者の立場の困難性を認識したうえで、それを乗り越えるために、触媒者(岡崎 2002)である日本語教員がどのように働きかけていくかを追求していく必要がある。

注

1. 「課題提起型日本語教育」という呼称で報告している。

参考文献

- Ohri Richa(2005)「母語話者による非母語話者のステレオタイプ構築 批判的談話分析の観点から」WEB 版リテラシー第2号(1) くろしお出版,1-8.
- 岡崎敏雄・西川寿美 (1993)「学習者のやりとりを通した教師の成長」『日本語学』12,31-41.
- 岡崎眸(2002)「多言語・多文化共生社会を切り開く日本語教育」『内省モデルに基づく日本語教育実習理論の構築』平成 11～13 年度科学研究費補助金研究(C)(2) 研究成果報告書 研究代表者 岡崎眸 299-321.
- 岡崎眸(2006)「多言語多文化共生社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究—総括と展望—」『多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究』平成 14～18 年度科学研究費補助金研究(B)(2) 研究成果報告書 研究代表者 岡崎眸 4-25.
- お茶の水女子大学大学院博士前期課程人間文化研究科言語文化専攻日本語教育コース教育実習報告書編集委員会(2000)『多言語・多文化社会を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』研究代表者 岡崎眸
- お茶の水女子大学大学院博士前期課程人間文化研究科言語文化専攻日本語教育コース教育実習報告書編集委員会(2001)『多言語・多文化社会を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』研究代表者 岡崎眸
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース(2002)『多言語多文化社会を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』平成 11～13 年度科学研究費補助金研究成果報告書(実践報告編) 研究代表者 岡崎眸
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース(2003)『多言語多文化社会を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』平成 14 年度科学研究費補助金研究 研究成果報告書(実践編) 研究代表者 岡崎眸
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース(2004)『多言語多文化社会を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』平成 15 年度科学研究費補助金研究 研究成果報告書(実践編) 研究代表者 岡崎眸
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース(2005)『多言語多文化社会を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』平成 16 年度科学研究費補助金研究 研究成果報告書(実践編) 研究代表者 岡崎眸
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース(2006)『多言語多文化社会を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』平成 17 年度科学研究費補助金研究 研究成果報告書(実践編) 研究代表者 岡崎眸
- 金珍淑・野々口ちとせ(2005)「多言語多文化教室における参加者間の談話分析—非対称な力関係を示す発話行為を中心に—」『多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究』平成 16 年度科学研究費補助金研究(B)(2) 研究成果中間報告書(研究論文編)
- 野元弘幸(2000)「研究ノート 課題提起型日本語教育の試み—課題提起型日本語学習教材の作成を中心に—」『東京都立大学人文学報』308号,31-54.
- Wallerstein, N. (1983) Language and culture in conflict : problem-posing in the ESL classroom. New York : Addison-Wesley.
- Paulo, F. (1970) Pedagogia do Oprimido. (小沢有作・楠原章・柿沢秀雄・伊藤周 訳 1979『被抑圧者の教育学』亜紀書房)